

業

大竹寺すき和紙

四百年の歴史の重みを実感。 そして四百年先の大竹和紙を思い描く―。

おおたけ手すき和紙保存会
会長 森本 勝見さん



この場所が肌に合う

「人手がなくて困っていると聞き、午前中に作業を手伝いに来たら、お昼に弁当が出た。それで午後からもやりました」。笑いながら話してくれるのは、会員数50人、『おおたけ手すき和紙保存会』六代目会長の森本勝見さん（75歳）。それまで和紙

カミワザを守る。

に興味があった訳でもなく、熱い思いなんていうかつこいものもなかった。それでもこの場所が自分と肌が合いそうだと直感したと森本さんは振り返ります。

江戸時代初期から始まったと伝わる小瀬川流域での手すき和紙の歴史。農耕に適した土地が少なく、山の斜面などで栽培したコウゾと、豊富な水を利用して、和紙生産が盛んだったといえます。大正時代には千軒の生産者で隆盛を極めたものの、第一次世界大戦後の不況、災害、産業構造の変化、和紙需要の減少などで、生産者が激減。昭和50年代末には、防鹿の大村調一さん（故人）のみとなっていました。紙すきの伝統を継承するため、昭和63年に、『おおたけ手すき和紙保存会』が発足し現在に至ります。保存会は平成31年に『おおたけ手すき和紙の里』のリニューアルに伴い指定管理者となり、施設の管理運営を担っています。

ボランティアの思いに込める

大竹和紙のこだわりは、原料となるコウゾを自分たちの手で育てていることも、一つの表れだと森本さんはいいます。

「原料をよそから買って来て紙をすくことはやりたくない。ボランティアの人たちが携わってくれたもので、商品化したい」。そう言い切



煮立った大釜で漂白

ります。和紙の製造過程では、コウゾの芽かき、草刈り、刈り取り、皮はぎなどさまざまな作業にボランティアの協力が必要です。一からの手作りというこだわりが、汗を流してくれた多くの人たちに応えることになる。そう森本さんは考えています。

「限られた原料ではあるけれど、紙をすける人を増やしていきたい。指定管理者として5年目になります。来年度までには後継者育成に取り組んでいきたい」。現在、2人が紙すきを行っています。森本さんはそんな構想を語ってくれました。

「大竹和紙の将来に危機感を持っているけれど、私たちが今何をやっているかを見てくれれば、間違いなく後を継いでくれる人が現れると思っています」。そう力を込めます。

「四百年続いてきた歴史の今その瞬間に携わっているのですから、その責任は重い。そして、これから先の四百年も続いてほしい」。森本さんは、大竹手すき和紙の遙かな未来を思い描いているようでした。

世界に通じるメッセージ そんな大竹和紙に一。

おおたけ手すき和紙保存会
竹中 智和さん



す。年間約2千枚をすいているのは、竹中智和さん（43歳）と古川真味さん（36歳）。竹中さんは数年前に飛び込みでここにやって来ました。

「伝統的なものに関心があり、ネットで、広島伝統文化」で検索していたら最初に和紙工房のブログがヒットしたんです。別のものが出ていたら違うことをしていたかもしれない」と竹中さんは、ほほ笑みます。

そこでボランティアを募集していることを知り、週末にコウゾの芽かきを手伝いに通っていました。当初は、紙すきをしようと思ってはいなかったのですが、それまでやっていた方が腰を痛めて、誰か替わりにしてくれないかという声を聞いたことで、後継者に手を挙げました。約1



すいた紙をていねいに重ねていく10年の経験を持つ古川真味さん。表面に指が少しでも触れたりすると何枚もへこんで使いものにならなくなります。

年間、「一分一秒が勝負」の心構えで習得していったと思ひ返します。

週2回の開所日、もろもろの作業をしながら研さんを積む中で、自身自身の変化も感じているようです。

「今まではお金をかせげば物がすぐに手に入る感覚があったのですが、紙1枚でも多くの工程を経てできるということを感じました。今度はそんな物の大切さを学校などの体験講座を通じて、子どもたちに伝えていきたい」。そんな気持ちが芽生えたといえます。

平和への願いをすき込みたい

「大竹和紙が残っていくためには、何か強みが必要」。広島市を通じて平和記念公園に奉納された折り鶴を分けてもらい、それらを細かく切つてすき込んだ和紙。先日の『G7広島サミット』でVIPの食事メニューの用紙に採用されました。もしかししたら、この和紙が世界に通じ

「限られた原料ではあるけれど、紙をすける人を増やしていきたい。指定管理者として5年目になります。来年度までには後継者育成に取り組んでいきたい」。現在、2人が紙すきを行っています。森本さんはそんな構想を語ってくれました。

「大竹和紙の将来に危機感を持っているけれど、私たちが今何をやっているかを見てくれれば、間違いなく後を継いでくれる人が現れると思っています」。そう力を込めます。

「四百年続いてきた歴史の今その瞬間に携わっているのですから、その責任は重い。そして、これから先の四百年も続いてほしい」。森本さんは、大竹手すき和紙の遙かな未来を思い描いているようでした。

（「山の日」のイベント会場で）
（ボランティアスタッフさんに聞いてみた。）



大谷 洋子さん（岩国市）
農作業が好きです。人手が足りないというコウゾ畑の手入れをしています。自然やエコに興味がある若い人が来てくれるといいと思う。地道だけど大切な作業です。



坂本 啓子さん（御園台）
自然のものを使う手作りの良さを感じます。出来上がった和紙の手触りが好きです。昔から続いているものだし、守っていきたい。イベントでPRするのもいいと思う。



吉本 孝子さん（黒川）
会社勤めを終え、時間ができたので4月からボランティアを始めました。ここが私と社会をつなぐ窓口のようです。子どもたちに教えられるか、ちょっと心配です。

おおたけ手すき和紙保存会のあゆみ									
昭和63年	平成元年	平成5年	平成7年	平成13年	平成20年	平成24年	平成26年	平成27年	平成30年
保存会発足。	大村調一さんの作業場を「おおたけ手すき和紙の里」（作業場・資料館）としてオープン。	大雨により作業場が倒壊する。	教育委員会が旧水道局官舎を「おおたけ手すき和紙の里」としてリニューアル。	手すき和紙伝承者養成講座を受講した2人が新たなすき手となる。	「広島県教育奨励賞」と「広島県地域文化功労者」を受賞。	保存会25周年イベント開催。	コウゾの芽かきなど、保存会支援のサポーター活動が始まる。	皮はぎなどを体験する「大竹手すき和紙サポーターズ育成事業」を実施。	保存会30周年記念祝賀会開催。
「おおたけ手すき和紙の里」体験学習棟リニューアルオープン。									



慎重に液をすくっているのは入江優和さん（大竹小1年）。興味深そうに覗き込む烏田蓮禾さんと弟の稟太郎くん（4歳）。

手すき和紙保存会は、郷土の文化への理解を深めてもらうために、手すき和紙の里での体験だけでなく、学校や公民館などで出前講座を開いたり、イベントに参加したりしています。

カミワザ体験。



（上）穴を開けた容器にはがきを載せ、つないだ掃除機の吸引力で水分を抜くという秘密兵器。（左）角山さん一家。出来上がった自作のはがきを見せてくれる3歳の大雅くん。

6月4日、マロンの里で開催された『ひろしま「山の旦」県民の集い』。手すき和紙保存会の体験ブースには、90人が来場、はがき作りを楽しみました。

コウゾの繊維が入ったトロトロの液体を木枠で数回すくって厚みをつけ、はがきの形に仕上げます。

廿日市市から訪れた角山真治さん。「こうした文化は残したほうがいいと思います」との感想。妻の花緒さんは大竹市出身で「小学校のころ和紙で作った紙太鼓をやったことがあります」と和紙との関わりを話してくれました。家族で作ったはがきは、部屋に飾るそうです。

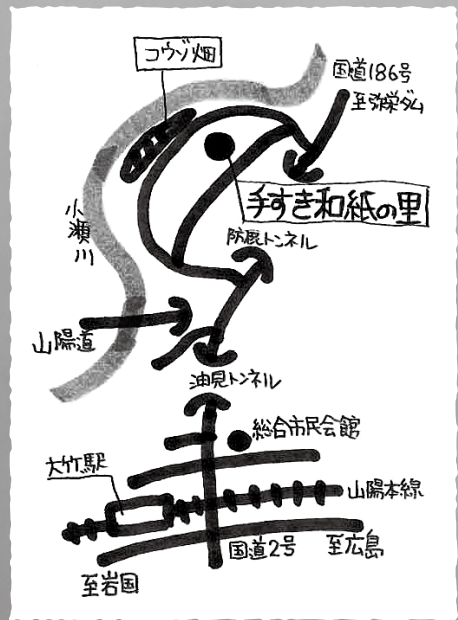
紙がどのようにできるのか知りたかったという烏田蓮禾さん（大竹小1年）は、「紙が木の皮からできているのでびっくりした」。謎が少し解けたようです。

皆さん、オンラインワンのはがき作りに満足げでした。



「前にやったときよりうまくできた」。コウゾの皮のごみ取り作業を手伝ったこともある上中裕太くん（小方小3年）。

【開所日】
火曜日・木曜日：10時～12時
第2・第4日曜日：10時～15時
※8月11日～16日、12月25日～1月5日は除く
その他の日も紙すき体験や見学などを受け付けています。
問い合わせ 0827-93-3576



おおたけ手すき和紙の里へ
行こう



手すき和紙体験申し込みフォームは、QRコードを読み込んでください。



A4サイズの和紙を2枚すいた含咲さん。「旅行などの思い出をつづっているファイルに保存します」。

大竹和紙
もっと注目を――。

防鹿地区の集落にある2棟の平屋。そこが『おおたけ手すき和紙の里』です。この日、はがきの紙すき体験に廿日市市から訪れたのは、天川晃門さん、含咲さん夫妻。含咲さんは、会長の森本さんの指導で、細かく切った折り紙を散りばめてみてみました。「折り紙が水の中でも散らばらずにできたのでよかった。大竹和紙が広島サミットの中でも使われたりしたそうなので、もっと注目されたいなと思います」。森本さんの大竹和紙の解説を聞き、そんな感想を持ったようです。



『放課後子ども教室』は、1年を通じてさまざまな体験をする生涯学習課の事業です。そのプログラムの一つとして、小方小学校の4年生から6年生の『かめっこクラブ』のメンバー17人が、はがき作りに挑戦しました。

木枠で繊維をすく姿もいろいろ。「じゃぶじゃぶ」と大胆な子もいれば、ピンと腕を伸ばして緊張気味にすくう子、ゆすり過ぎて木枠の中でよれてしまい、もう一度やり直す子と、はがきの出来栄えにも個性が出ます。7月は出来上がったはがきを使って絵手紙に挑戦です。

和紙に関するクイズや質問もあり、楽しいひとときを過ごしました。



原料のコウゾの幹と皮を持って説明。

かめっこクラブ
和紙のはがき作りに挑戦――。

世界に向けて泳げ 和紙の鯉のぼり――。

5月に行われた『G7広島サミット』。県立体育館（広島グリーンアリーナ）に設けられた『国際メディアセンタ―』に手描き鯉のぼりが飾られました。大竹手すき和紙を使った鯉のぼりを描いたのは、杉本海さん。長年鯉のぼり作りを守ってきた大石雅子さんの跡を継ぎ、杉本さんは描き続けています。

「大竹で伝統を守り伝える



飾られたのは3mの緋鯉、2mの真鯉と桜を描いたピンクの鯉、1.5mの緑の鯉の4匹。(写真は外務省ホームページから)

カミワザと出会う。

アーティストたちが大竹手すき和紙を用いた作品を発表し、また原料のコウゾの新たな活用法に取り組む人もいます。大竹和紙の魅力と出会える場所を紹介します。

ヒルトン広島

昨秋、広島市にオープンした世界的なホテル『ヒルトン広島』。その6階にある『日本料理「泉水」』の照明に、大竹和紙が採用されています。

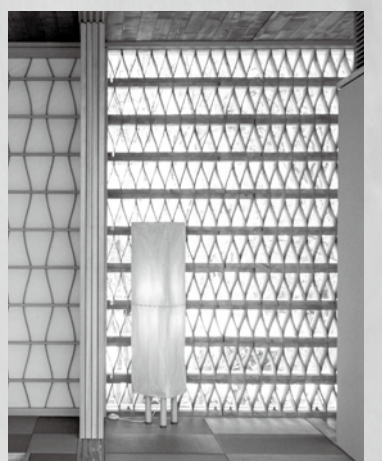
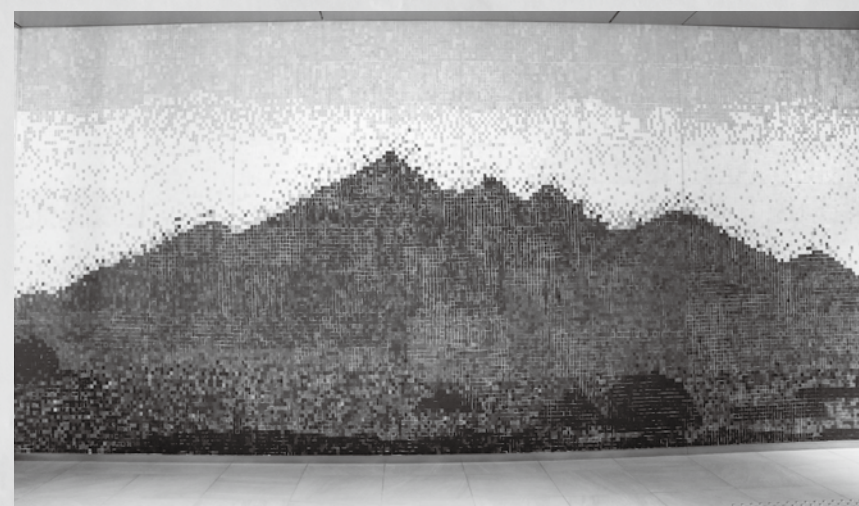


こんなところに 大竹和紙

広島に最近生まれた施設にも大竹手すき和紙を使った作品が彩りを添えています。新たなスポットで大竹和紙に出会ってみませんか。

広島JPビルディング

広島駅南口前の広島JPビルディング2階エントランスのクラフトウォールに、大竹手すき和紙が使われています。和紙職人のハタノワタル氏の作品で、瀬戸内海の多島美を表現したものです。壁面の裏に設置された照明の光が透過して、島々が浮かび上がって見えてくるようです。



Simose Art Garden Villa

晴海の下瀬美術館敷地内にある宿泊施設ヴィラ。ここにも大竹和紙を使った照明器具があります。意匠を凝らした部屋をほんのり暖かな光が包みます。

【製作：Ban Takuma】
2021年武蔵野美術大学卒業。現在インテリアデザインを中心にフリーランスとして活動中。「和紙を透過した柔らかな光が美しく、改めて和紙と光の相性の良さを感じました」。



切手サイズの和紙約18万2千枚を貼り合わせ、宮島(写真上)をはじめ、県内の島々が描かれている。

ふるさと納税返礼品に意欲 コウゾの葉をお茶に――。

大竹和紙の原料となるクワ科の低木コウゾ。良質な和紙をすくためには、脇芽を摘まなければなりません。摘んだ脇芽の葉は廃棄してしました。その葉を使ってお茶を作れないかと考えたのが、玖波2丁目でブックカフェ『エムズ☆SAI K I』を営む佐伯真理さんです。

店で販売する本のしおりやカバーに大竹和紙が使えないかと思い『おおたけ手すき和紙の里』を訪ねたことがきっかけでした。そこで、コウゾの脇芽のことを知り思いついたといいます。元々ハーブティーを作っていた経験があったことも後押しとなったようです。



▲コウゾ茶を注いでくれる佐伯さん。ほんのりと香りが漂います。



手すき和紙の里に和紙を購入に来た、総合市民会館の日本画グループの柴田功子さん。厚みや手ざわりを確かめ念入りに選びます。

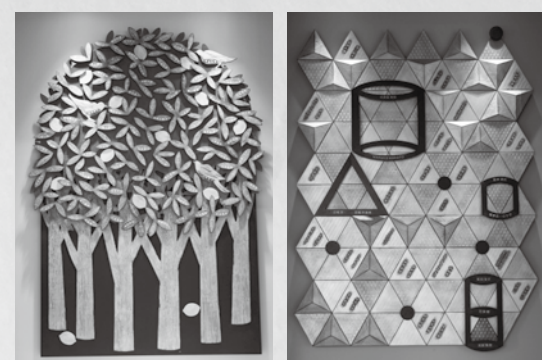
10ページの下地画像は、『G7広島サミット』で、各国首脳の配偶者たちの食事でメニュー表に使われた、折り鶴をすき込んだ大竹手すき和紙と同じものです。

多くの人の関わりで 生まれる大竹和紙――。

2月に供用開始した大竹駅の自由通路。その壁面に飾られたレリーフは、大竹手すき和紙と漆を使った広島市立大学芸術学部准教授の青木伸介さんの作品です。

青木さんは、ものづくりを学ぶ学生たちに和紙作りの工程を経験させるため、5年前から保存会と連携した取り組みを行っています。

「大竹和紙は素材を作っているところから多くの人が関わっているのが魅力」と語っていました。



大竹和紙工房

お客さんから届いた和紙の作品がうれしい――。



大竹和紙工房

営業日
火・木曜日10時～13時
新町1-5-1 ☎523641

市立図書館に和紙や紙に関する本のコーナーがあります。



健康が一番の資産。運動習慣は、健康づくりに欠かせない要素です。筋トレグッズやヨガマット、健康レシピ本を買ったことがあるけど、なかなか続かないという方、ぜひ「元気はつらつ教室」に参加しませんか！



人生を変える40分を 健康教室で未来の自分に投資しよう 元気はつらつ教室（介護予防教室）

問い合わせ 地域介護課 ☎286226

一説には、健康に関して知識として「知っている」から「やってみる」「やってみる」から「続ける（習慣になっっている）」までステップアップできる方は、それぞれ10%ずつしかないそうです。つまり健康習慣を持つ方は、市で換算すると260人程度しかないことになります。

そんなハードルの高い健康習慣ですが、なんと大竹には、参加者の半数以上が継続している健康事業があります。それが「元気はつらつ教室」です。この教室は、参加者の筋力アップを目的としたプログラムを、スポーツインストラクターが指導するものです。



スポーツインストラクター

【各教室の日時案内】

とき(毎週)	ところ	時間(40分)
月曜日	おがたピア (小方1丁目)	10時の部 10時50分の部
水曜日	サントピア大竹 (西栄1丁目)	14時の部 14時50分の部
木曜日 New!!	総合市民会館 (立戸1丁目) ※運動強度低め	10時の部 10時50分の部

体力に自信のない方向け

継続の秘密は「手軽さ」です。予約は不要で、時間も40分と短め。必要なものは、タオルと飲み物の2つだけです。（総合市民会館では室内シューズも必要です）

好評のため今年度は、より体力に自信のない方向けの教室を総合市民会館で開いています。

参加している方は、「リフレッシュ」「運動不足解消」「体力づくり」などを目的に毎週足を運んでいます。

無料・予約不要・短時間でできます。あなたもぜひこの機会に、近場の会場で一緒に汗を流しませんか。

市民のつどい

- スローガン
- 地域ぐるみで 青少年を守ろう 育てよう
 - 犯罪や非行を防止し、立ち直りを支える 地域のチカラ

問い合わせ
青少年育成センター（生涯学習課内）
☎28-5680

7月は「青少年の非行・被害防止」「社会を明るくする運動」全国強調月間として、さまざまな行事が全国で行われます。

市内では、青少年非行防止実行委員会の構成機関・団体が協力し、街頭キャンペーン、巡回広報活動、共同街頭補導や巡回パトロールなどが実施されます。青少年の非行や犯罪防止、健全育成について地域全体で取り組んでいきましょう。

とき 7月8日(土)13時～15時（12時30分開場）

ところ アゼリアホール

内容

○合唱「ひまわりの譜」○式典
○講演会 テーマ「子どもたちの可能性を引き出す支援の在り方」子ども支援と関係づくりの方法」／講師・和田晋さん（比治山大学非常勤講師）
○中学生意見発表



募集 ボランティアスタッフ

おおたけ手すき和紙保存会は、特産の手すき和紙の原料となるコウゾの脇芽を摘む作業をしています。

とき 7月9日、23日、8月6日、20日の日曜日 9時～11時ごろ（予備日9月17日）

※9時までにおおたけ手すき和紙の里（防鹿）に集合。

ところ 防鹿河川敷の畑

申し込み おおたけ手すき和紙の里 ☎93-3576

※保存会では手すき和紙の里で和紙づくりの活動と一緒にできる人を募集しています。芽かきや皮はぎなどの作業のほか、紙すきインストラクター、商品開発、情報発信などお手伝いできる分野でのボランティアを歓迎しています。

一かミワザを支える。

コウゾ畑でいい汗流すー。 芽かき作業のボランティア

6月11日の朝、昨夜からの雨も上がり、『手すき和紙の里』にボランティアの人たちが集まってきました。夏の時期、コウゾの茎と葉の付け根から伸びてくる脇芽を摘んでいく「芽かき」という作業を繰り返さなければなりません。この芽があるコウゾの成長を妨げることになりません。良質な和紙をすくためには大切な作業です。

ボランティアの人たちは二手に分かれ、防鹿地区と三ツ石地区にあるコウゾ畑に向かいます。

防鹿の小瀬川河川敷の畑一面に葉を広げたコウゾ。その中に分け入り脇芽を摘んでいきます。初めて参加した人は、ベテランボランティアの人の説明を聞きながらの作業に、いい汗を流していました。夏場の芽かき、草刈りなど地道な作業は人海戦術。保存会では多くのボランティアを募っています。

現在は、2地区で栽培しているコウゾですが、今年度には旧穂仁原小学校跡地の一部にもコウゾ畑を整備する予定にしています。



コウゾの収穫（1月）

ており、さらなるボランティアの力が必要で。

コウゾ栽培の1年

春【4月～5月】 施肥・草取り
夏【6月～9月】 芽かき・草刈り
冬【11月～1月】 刈り取り

ボランティアが元気をくれるー。

『手すき和紙の里』のある防鹿地区。地元で保存会活動を見守る福田豊実さん（85歳）は、紙すきが盛んだったころを振り返ります。

「昔は女の子が生まれたら紙すきをしてくれるようになったと喜んでいました」。女性が紙すきを支えた、そんな時代でした。しかし、昭和26年の『ルース台風』で小瀬川が氾濫。地区の紙すきは、壊滅的な打撃を受けたといわれています。その後、広島県無形文化財保持者の大村調一さんが引退。文化・技術の継承のため地区住民により保存会が設立されました。

しかし、住民の高齢化もあり、ボランティアとして参加していた人たちが、その運営を引き継ぎ今に至ります。

「この地区に人が集まり人の声がある。元気を与えてくれるような気がする」。目を細める福田さんです。

地区住民とボランティア。その関係が、伝統の手すき和紙を支えているのかもしれない。

